こう読んだ

『日本農書全集』の月報へのご寄稿の一部の数節を再録させていただきました。全文をお読みになりたい場合は、コピーをお送りいたします。ご希望の著者名を明記し、80円切手同封の上、下記までお申込み下さい。〈〒177-0054 東京都練馬区立野町15-45 農文協図書館農書係〉

庶民の考え方を読み取る

速水　融

よくぞここまでテクストを集めたものと驚嘆すると同時に、このような地味な仕事を続けられている方々に心から感謝した い。原文と現代語訳を同じページの上下に組んであるのも、読者をどれだけ助け、多くの人々に江戸時代の人々の持っていた考え方を伝えてくれるのに役立つか、想像を超えるものがあるだろう。

農書は、書斎にこもった学者の産物というよりは、実際に働く農民や生産者の筆によるものが多い。農事日誌はもちろん、経験に基づく記述を通して、他では得られない庶民の考え方が描かれている。そこに書かれている農業技術の具体像も大事だが、もう一つ突っ込んで、農書の深層に潜む当時の人々のマンタリテを読み取る、といった利用も可能である。そういった分析を積み重ねることによって、歴史研究は新しい地平が切り開かれるに違いないし、さらに第Ⅲ期以降の「農書全集」を今から期待したい。

（一九九四、経済史）

江戸時代の科学的な研究

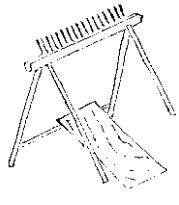
板倉聖宣

いまなお「江戸時代の大部分の農民は、米を作ってもみな年貢に取られてアワ・ヒエばかり食べていた」と思っている人が多いが、私はそれがとんでもない間違いであることを証明したつもりである（拙著『歴史の見方考え方』仮説社を参照）。

私に言わせれば、そんなとんでもない間違いが長い間人々の心を支配するにまかせておくような歴史研究なら、まるで信用するに値しないことになる。

「日本農書全集」の発刊を一つのきっかけにして、江戸時代の科学的な研究が本格的にはじまることを期待したい。

（一九九四、科学史）

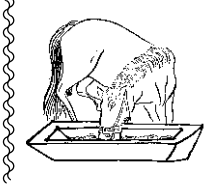


民衆知と学問との交流

塚本　学

多くの農民の農書が、経験の蓄積と交流によって、「農業全書」の学問では覆いきれない地域ごとの特性にたった農業の知恵をまとめていった努力は、ひろく日本の文化の歴史の上でも重要な事実にちがいないが、『老農置土産』は、そのような面をもつだけではなく、現実から抽象化されるがゆえ実用にや遠ざかる著述からも学ぶ姿勢を表明しているのである。学問と実用との関係、文字知識と生きるための知恵との交流の上で、すぐれた見識といえよう。文人の側での民衆の生活知に学ぶうごきとあい応じて、民衆のあいだに学問への関心が高まっていく時代を思わせる。

（一九九四、民俗学）



農書に宿る近代精神

谷沢永一

この無私にして尽瘁する世のため人のための祈願が、最も純粋に結晶した知的情熱の軌跡、それが今に残された厖大な農書文献ではあるまいか。およそ多種多様な広義の学問的成果のうち、最も早く消え去る厄介物は議論倒れの侃々諤々であり、逆に、いちばんあとまでしっかり残って確実にものをいうのは実学の調査探索である。農書は江戸文化の華あり粋であると見なければならぬ。

農書に理屈は不要である。徹頭徹尾、実地に即した実験の成果である。そして農書は報われることを期待せぬ献身から滲み出た労苦の滴りである。農書の本質をなすものは実事求是と無私奉公の姿勢である。とすれば、この情熱こそ、まさに近代精神そのものではないのか。近代社会の育成に不可欠な精神倫理ではないのか。

（一九九五、評論家）

江戸の「園芸文化」

安達瞳子

椿に限らず、日本の園芸史上大きく浮かび上がるのはいつも江戸時代だ。明治が文明開化なら江戸は「園芸開花」。なぜだろうと思う。武家文化が貴族社会に対する革命なら、町人文化は武家社会への反骨だ。江戸の銘花は、武家だけでも町方だけでも、どちらか一方では誕生しなかったに違いない。文化を創るエネルギー源は、対立の底から生まれるものなのだろうか。

一つの堅固なリアリティの国へ

村田喜代子

いったい農書というものは、どんな人たちが読むのだろうか。たとえばその中の林業の部をひもとくと、近世林業の技術体系が浮かびあがる。森林国日本の方途を探ろうとするとき、源流を探るのは示唆にとむだろう。農業、漁業もしかりだ。

けれど現代農業にも漁業、林業にもまったく無縁の人間がいる。私のような者のことだ。それがこういう農書を最初に手にしたは、小説を書くための資料としてだった。ところが当初の目的からはずれて、今ではなんだか純粋読者になろうとしている。いったいどうしてこんなことになったのだろう。

今も私は農書やそれに類する昔の資料書を読みふけるが、自分の資料としてではない。一つの堅固なリアリティの国へ、しばし没入する愉しみのためである。

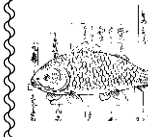
（一九九六、作家）

江戸時代は活字文化の時代

朝尾直弘

農書出版の草分けであった『農業全書』にも、そのすべての作物についてのその姿が図で示されている。この書の序文に貝原益軒が、かつて自分が中国の農書をかなでやさしく書こうとしてはたさず、それを宮崎安貞が日本社会の実地に即して完成したと述べたのは有名である。絵や図を入れ、漢字かな混じりの文章で書くことそ、この時代に達成された「日本文化」をささえた条件であり、それが日本の活字文化とよべるものであった。国語の変革の時代にそれは登場したのであった。

（一九九六、近世史）



日本がそのまま表わされた絵農書

ジョニー・ハイマス

私は特に田んぼの美しさに魅かれ、全国各地を歩きました。稲の田植えから収穫、そしておお米になってからごはんになるまで、つまり種もみからごはんになるまでを写真に撮ったのですが、第七一巻の「老農夜話」という絵巻をみると、写真と絵画というジャンルのちがいはあるものの、その表現したい内容・モチーフは同じだという気がしますね。ごはんを炊き、それをいただくところまで表現するところなど私の写真と同じですね。

躍動感に溢れた絵（彫刻）もありますし、静かな感じの絵（蒔絵・漆絵）もあります。どれもほんとうです。稲作をめぐる四季の風景はさまざまです。そのときどきで全く異なった景観を見せてくれます。だから日本の水田風景は素晴らしいのです。

（一九九六、写真家）

「日本農書全集」収録農書一覧

【漁業】

第58巻　松前産物大概鑑（松前）、関東鰯網来由記（上総）、能登国採魚図絵（能登）、安下浦年中行事（周防）、小川嶋鯨鯢合戦（肥前）　●6500円

第59巻　玉川鮎御用中日記（武蔵）、氷曳日記帳（信濃）、松江湖漁場由来記（出雲）、釣客伝（武蔵）、金魚養玩草（和泉）　●7000円

【畜産・獣医】

第60巻　鵜書（武蔵）、犬狗養畜伝（摂津）、廏作附飼方之次第（乗用馬）、牛書（播磨）、安西流馬医巻物、万病馬療鍼灸撮要（山城）、解馬新書（武蔵）　●7000円

【農法普及】

第61巻　豊秋農笑種（出雲）、試験田畑（羽後）、御米作方実語之教（信濃）、勧農微志、伊勢錦（大和）、筆松といふ者の米作りの話（大和）、畑稲（大和）、讃岐砂糖製法聞書（播磨）、廻在之日記（羽後）、東道農事荒増（周防）　●6800円

第62巻　農業往来（豊後）、再新百性往来豊年蔵（摂津）、満作往来（武蔵）、新撰養蚕往来（武蔵）、米徳糠藁籾用方教訓童子道知辺、三等往来（阿波）、門田の栄（三河）、勧農和訓抄（甲斐）、農業家訓記（尾張）　●7000円

【農村振興】

第63巻　儀定書（信濃）、永代取極申印証之事（下総）、永代取極議定書（下総）、暮方取直日掛縄索手段帳（駿河）、報徳作大益細伝記（遠江・駿河）、仕事割控（下総）、年中仕業割并日記控（下総）、耕作会（羽後）　●6800円

【開発と保全】

第64巻　当八重原新田開発曰書（信濃）、尾州入鹿御池開発記（尾張）、飯沼定式目録高帳（下総）、出羽国飽海郡遊左郷西浜植付縁起（羽前）、木庭停止論（対馬）　●6500円

第65巻　川除仕様帳（甲斐）、積方見合帳（紀伊）、治河要録、通潤橋仕法書（肥後）　●6500円

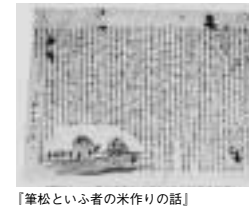
【災害と復興】

第66巻　富士山砂降り訴願記録（相模）、富士山焼出し砂石降り之事（相模）、浅間大変覚書（上野）、嶋原大変記（肥前）、弘化大地震見聞記（信濃）、大地震難渋日記（大和）、高崎浦地震津波記録（安房）、大地震津波実記控帳（志摩）　●6500円

第67巻　大水記（武蔵）、水損難渋大平記（備中）、洪水心得方（備前）、享保十七壬子大変記（筑前）、年代記（陸前）、凶年違作日記・附録（信濃）　●6000円

【本草・救荒】

第68巻　備荒草木図（陸中）、農家心得草、薬草木作植書付（武蔵）、農家用心集（下野）　●6500円



『筆松といふ者の米作りの話』

『弘化大地震見聞記』

ご注文は　農文協（社団法人 農山漁村文化協会）〒107-8668　東京都港区赤坂7-6-1　TEL.03-3585-1141　FAX.03-3589-1387　振替00120-3-144478　URL http://www.ruralnet.or.jp/　価格は税込

月報抄録　私は「農書」を

方言史資料としての農書

小林　隆

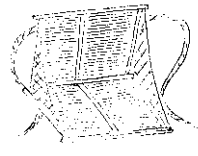
方言史資料として、農書が一番魅力的だと思うのは、それが全国各地で作成されているという点である。もちろん、ひとくちに農書と言っても、その性格に幅のあることは確かだが、一応同じ分野の文献が、全国的に得られるというのは、資料の量と等質性の点で、たいへん有利である。農書は、時代的には近世のものがほとんどであるから、これを利用することで、近世の全国的な方言の分布をつかむことができる。また、それと現代の方言分布を比較すれば、数百年間の変動を明らかにできる。このような試みは、ヨーロッパでは古記録などを利用した研究があるが、日本ではまだなかった。（一九九七、方言学）

絵画資料を「見る」ことから

石川英輔

江戸時代は、専門的な刊行書でさえ豊富な挿絵があるのが普通だった。『日本農書全集』を見ても、農業技術書といいながら、文献というよりむしろ図会ものの一種といえるほど見事な絵画資料になっている本が多い。

明治維新以来不当に軽視されてきた江戸時代を、改めて見直そうとする風潮が強くなっているが、今度こそ、皇国史観、マルクス史観のような上滑りした独断的な歴史観が先立っての見直しにならないようにしたいものだ。そのためには、人類が生存するために何が重要なのかをよく見定めて、先祖たちの生活を評価するほかないだろう。（一九九七、作家）



農書にみる漬物のノウハウ

針塚藤重

私は漬物を漬けて販売しているのだが、漬物のノウハウが詰まっているのが、茨城県の農書、加藤寛斎『菜園温古録』（第三巻）である。

たとえば「たくあん漬」の項に、〈米ぬかを普通どおりに入れ、干した大根を漬ける。粟ぬかを米ぬかにまぜて入れると美しい黄色に仕上がる。〉とある。

江戸時代、すでにたくあんの色調を考え、いろいろの試みをしていたことがわかる。粟ぬかには黄色い色素のカロチノイドが多く、鮮やかな色合いに漬けあがる。食べものは見た目がきれいで、うまくなければならない。私の持論と一致する。

村おこしの一環として漬物をテーマに講演を頼まれることがあるが、そのときは『菜園温古録』のなかにある漬物のレシピのいくつかを教えることにしている。先人の知恵は人びとの心に素直に入ってゆくようだ。

（一九九七、農家・漬物業）

すぐれた林業家ほど先人の蓄積から学ぶ

内山　節

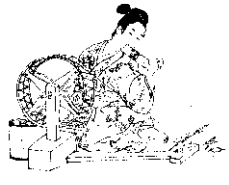
森が生命力を低下させている背景には、生き生きとした森林と人間の関係がなくなってきているという現実があり、さらにその奥には、各地に適し、それぞれ森林所有者の個性を表現できるような、森づくりの判断力や腕、知恵の衰退があるといってもよい。

『日本農書全集』の林業の巻が刊行されるのは、ありがたいことである。先人の蓄積から学ぶ。すぐれた林家ほど、いまそれを求めているのである。（一九九七、哲学者）

近世は創意工夫の時代

福田アジオ

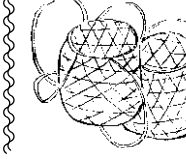
近世は創意工夫に満ちた時代であった。近世に著された多くの農書はそれを示している。人びとは農書を読み、時には写し、さらに場合によっては自らの体験や工夫を文字にして著した。日本各地の農書を網羅した『日本農書全集』はそのことをはじめて教えてくれた。（一九九七、民俗学）



農書から見えてくる「土台技術」

宇根　豊

現代の農業技術書、とくに研究者や学者の書いたテキストのほとんどは「上部技術」の記述である。一方江戸時代の農書の記述は、土台技術が大半だ。近代化技術は「科学」という雄弁な道具を駆使するので、その記述はわかりやすく、どこにでも通用するように見える。しかし、逆に科学でとらえることができない世界は、表現できなくなってしまった。近代以前の農書は「科学」という武器をもたない分、さまざまな表現上の工夫がある。（一九九八、農業技術者）

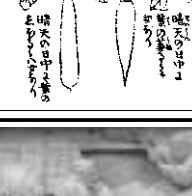


農書を読む楽しみ

門脇栄悦

私は、農書を軽トラに積んでおいて持ち歩いている。畑だろうと道端だろうと、読みたくなったら、ところかまわず読んでいる。「そうなんだ」と共感できるところや「そういうことか」と思い至ったところには傍線を引く。だから特に面白い本、たとえば大蔵永常の『農稼肥培論』、佐藤信淵の『培養秘録』（ともに六九巻）などは、傍線で真っ黒になっている。

私と同じく、スイカをつくっている友達に貸したところ、面白いといって返してくれない。だから、今私が読んでいるのは二冊目だ。ふだん、植物の育ち方とか、土壌や肥料のとらえ方などについて意見を交換しあっている仲なので、同じようなところに反応しているのをみると、ついニヤリとしてしまう。（一九九八、農家）



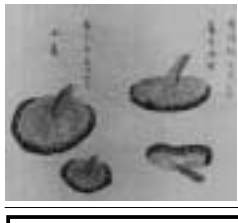
これからの時代を考えるヒント

大石慎三郎

明治以降の上から積み下げた社会にいろいろ問題があるというので、いま「地方の時代」という発想が出てきています。つまり、地方中心の社会に組み立て直そうという動きですが、その際に非常に参考になるのが、「日本農書全集」全七二巻だと、私は思っています。これは私の正直な感想です。

下から澎湃として起こった産業面での発展・蓄積がその内容をなしていて、当時の経験のほぼ全部がこの全集に収められていると思います。

「日本農書全集」には、江戸時代という変化に富んだ実に魅力的な時代の経験がぎっしり詰まっていて、これからの時代を考えるうえでヒントがいっぱいあると思います。人間というのは、案外進歩しないものですから、同じ悩みを抱え、苦闘している様子がよくわかる。それをどう読み取り、どう生かしていくかは読者のみなさんの読み方次第です。（一九九九、近世史）



別巻　収録農書一覧　分類索引

農文協編・B5・940頁　●24000円

『農耕彫刻』

【収録農書一覧】現代的課題を解くキーワードからの収録農書案内（国土保全、危機管理、産地形成、地域教育など）／巻順収録農書一覧／五十音順収録農書名・著者名とその読みおよび解題・現代語訳者一覧／成立地（都道府県・市町村）別収録農書一覧／成立年順収録農書一覧／分野別収録農書一覧

【分類索引】知りたい事柄がどの農書のどこにでているかを案内。農法・農作業、諸稼ぎ・職業、衣食住、人名、地名、成句・ことわざなど27のテーマで分類。〈同義語も案内〉例えば「さつまいも」であれば、それがどこに現れるかを示した上で、「あかいも」「から芋」「甘薯」など同義語についても、それぞれについて案内。

【学者の農書】

第69巻　農稼肥培論（大蔵永常）、培養秘録（佐藤信淵）　●6500円

第70巻　甘蔗培養并ニ製造ノ法（平賀源内）、羽陽秋北水土録（羽後、釈浄院）、甘藷記（青木昆陽・小比賀時胤）、再種方（大蔵永常）、二物考（高野長英）、農家須知（土佐、宮地太仲）　●6800円

【絵農書】

第71巻　老農夜話（武蔵）、八重山農耕図（琉球）、豊年満作襖絵（上野）、農耕欄間絵（越後）、農耕図染小袖、農耕図刺繍袱紗、農耕漆絵折敷（岩代）、農耕蒔絵膳椀（近江）、農耕蒔絵十二組杯（岩代）、農耕蒔絵三組杯（越後）、天棚農耕彫刻（下野）、農耕彫刻（下野）、田山暦（陸中）、盛岡暦（陸中）、竈神奉納絵（越後）　●6500円

第72巻　大泉四季農業図（羽前）、筑後国農耕図稿（筑後）、土佐派農耕屏風、渡辺始興筆四季耕作図屏風（京都近郊）、鼎春嶽筆　農耕屏風（摂津）、岡本茂彦筆　農耕掛物（山城）、青山永耕筆　農耕掛物（羽前）、白波瀬尚貞筆　農耕掛物（武蔵）、農業満作出来秋之図（武蔵）、駿河裾野の田植（武蔵）、豊年萬作之図（武蔵）、農家耕作之図（武蔵）、農　田うへ（武蔵）、四季耕穡之図（武蔵）、慶徳稲荷神社春夏秋冬農耕絵馬（岩代）、光福寺春耕図絵馬（山城）、早川神社四季耕作図絵馬（播磨）　●7500円

高野長英『二物考』

「日本農書全集」常設販売店

農業書センター

東京・大手町・JAビル地下1階　地下鉄大手町駅A3出口直結

TEL03（3245）7647　FAX03（3270）2800

ご注文は　農文協（社団法人 農山漁村文化協会）〒107-8668　東京都港区赤坂7-6-1　TEL.03-3585-1141　FAX.03-3589-1387　振替00120-3-144478　URL http://www.ruralnet.or.jp/　価格は税込